

幼児期における身辺自立の協同的取り組みと 保護者の意識変化について

～登園の準備活動における主体的・協同的活動の実践活動から～

脇 信明 小西 祐馬（長崎大学教育学部）

I. はじめに

幼児期において自立して生活する力、いわゆる身辺自立の力を身に付けることは、子どもにとって大切なことである。ここでいう自立とは、もちろん保護者からの独立ではなく、「自分の事を自分でする」ということであり、いわゆる排泄や清潔、着脱衣といった基本的生活習慣の獲得のことを指す。しかし「〇〇ができる(できない)」といった個別的・能力的側面の結果ばかりに着目するのではなく、身辺自立とは「できるようになりたい」という発達要求を膨らませながら、生活の主体者として自主的に活動できる人格の成長を見通した視点が大切である。幼児期後半、とりわけ就学前の時期ともなると、身の回りの準備などについても自立の力が求められるようになる。毎日の準備物を忘れないようにする事は、子ども本人にとって園生活をスムーズに送るためには必要なものである。

また、その自立の力は子ども自身よりもむしろ保護者や保育者の方がより気になっていることではないだろうか。保護者にとっては、我が子が自立した生活(園生活や今後の学校生活)を送るにあたって、身辺自立がどれくらい身についているかで学習に取り組む状況が大きく変わってくることも考えられるからだ。しかし幼児期では、子ども自身に身辺の準備を任せると、余計に支度時間が必要になってくることが想像できるため、どうしても保護者が時間的効率を考えて子どもの代わりに行っていることも多いと考えられる。もちろん、それは保護者として我が子の世話をするということでもあるが、むしろ子どもにさせるよりは保護者自身が準備を行う方が圧倒的に早く、また間違えがないからである。しかし、そういう状況が日常化する事は、いつまでも子ども自身が意識して身辺の準備をしていくこと、ひいては生活を主体的に送る姿が見られることにはつながらないであろう。

保育現場においても、子ども一人ひとりが生活の主体者としての力が身につくことができるように日々意識的に取り組んでいる園も多い。前述したように、保護者にとっても子どもの自立は大きな願いでもあるので、園側としても、そういうニーズに応えるべく、また小学校に送り出す側としても、自立への意識を子どもたちが育組んでいけるような働きかけを大なり小なり取り組んでいる。

しかしながら、身の回りの準備を行うことなどをはじめとした主体的な生活の習慣化は難しく、その働きかけについては個別的に指導・注意することが多いのではないだろうか。例えば、忘れ物をしている子どもがいて「その子だけに注意を促す」ということで終始してしまうなどである。さらに、忘れ物が多い子どもは、繰り返し何度も注意を重ねるといった対処が行われるケースも多く、さらに「注意力散漫である」「意識が足りない」「保育者の指示を理解できない」など、個人の性格や特質でもあるかのような評価を受け、保育者から否定的に受けとめられることさえもある。

子ども自身が忘れ物をしないように意識することは大切なことであるが、個人への繰り返しの注意伝達だけで、行動の変容が行われるのであろうか。そういう問いに参考となる実践がある。

愛知県で保育園の園長を務める平松知子¹氏は、自身の実践のなかで、忘れ物の多い子どもに次のような実践に取り組んでいる。

¹ 平松知子『子どもが葛藤を乗り越えるとき』ひとなる書房,2012

子どもが保育園で使うエプロンを忘れないようにするために、保護者に伝えたり注意喚起するのではなく、子ども自身がエプロンを忘れないように「エプロン」と書かれたペンダントを子どもの首にかけ「家に帰ったら玄関にこのペンダントをノブにかけるんだよ」と伝え、そして「明日の朝、このペンダントを見たら、お母さんに「エプロンどこ？」と自分から言うんだよ」を子どもに伝えている。

このような活動によって、その子は忘れ物がなく園生活を送ることができたというものだ。この事例から学ぶべき点は、三つあると考える。

一つ目としては、「忘れないような手立て」を考え、子どもと確認しながら実行しやすい具体的な方法に取り組んでいるということである。ペンダントという具体物を見ることで、持参物を想起する「仕組み」を作っている。ペンダントという特別なものを玄関にかけることで、翌朝の出発時には必ず子どもも保護者も目に入る状況を作って、忘れ物がないようにしている。

二つ目には、準備を保護者に依頼するのではなく、子ども自身が自分にとって必要なものを準備することができるようになる「体験」をすることである。つまり、生活の主体となって取り組むように、促している点である。もちろん、その背景にはこの子の保護者が忘れ物が多いという現実があり保護者に任せられないという意識もあったのかもしれない。しかし、大切なことは、エプロンは子ども自身が活動の中で使うものであり、それがないと困るのは自分である。準備も自身のこととして捉えることができ、かつ、子ども自身から親に働きかけられるようにしており、子どもが主体的に活動できるようにしているのである。

三つ目としては、「保護者の意識の変革」を期待することができることである。園の先生が渡してくれたことを我が子がちゃんと意識し、守り、行動する力があること、それで我が子が充実した園生活を送ることができていることを知ることで、保護者としても意識を変えるきっかけになるのではないか。

こういう手立てや工夫があってこそ、子どもたちは「忘れ物」をしなくなるのであり、また同時に生活の主体者として、自分で行動できる人格を獲得していくとともに、自立した生活を営む一端を保護者が意識する契機となることができるのではないだろうか。

従来通り、忘れ物がないように反復的に子どもに注意するのではなく、もっと生活の主体者として、成長の喜びとともに実感できるような取り組みが必要なのである。

本研究では、幼児の身の回りの準備を子ども自らが主体的に取り組むための実践に取り組んだある認定こども園の取り組みについて、その効果や意義について検討することを目的とする。また同時にその取り組みを通して保護者の中での意識の変化についても検討を加えることを目的とする。

II. 方法

1. 対象園

F 県 K 市 私立 幼保連携型認定こども園 A 幼稚園 5 歳児 50 名 (2 クラス)

2. 研究(活動) 期間

2017 年 1 月～3 月

Ⅲ. 実践の展開

1. A園のこれまで現状について

A園では、これまで毎週月曜日に「清潔検査」という登園の準備の確認の取り組みを行なっている。具体的には、ハンカチ・ティッシュを持ってきているか、爪は切っているか、という身の回りの清潔の準備状況であったり、または制服のリボンをつけてくることや襟を整えるといった服装について、子どもたちと確認をしている。

これまでは忘れている子どもが多く、その都度、教師がその子どもに対し直接注意など繰り返して行なってきた。しかし、忘れ物などが減る様子もなく、クラス全員が忘れ物がない日はなかったということだ。

また、忘れ物が多い子、少ない子と個人差があることもわかっていた。多い子は、ほぼ毎日のように忘れ物がある。一方、忘れ物が少ない子どもであっても、それが毎日続いているわけではない。よって、子どもたちの意識の中に朝の準備物への意識が定着しているともいえない状況がある。

各クラス担任もどのようにしたら子どもたちに身の回りの準備が身につくのか悩みながらも、子どもたちに毎回「次回は忘れないようにしようね」と注意を繰り返すだけになっているというのが現状である。

以前の家庭へのアンケート調査で、子どもが自分で登園のためのハンカチ・ティッシュを準備するか？という問いに対して、「はい」と答えた家庭は全体の半分の48%にとどまることがわかった。つまりは自分で準備しておらず、保護者が準備して持たせている様子が伺える。

子どもも「登園等の準備は保護者がしてくれるもの」という意識でいるならば、自主的に登園の準備を自ら行うようになることは難しいと考えられる。

2. 身辺自立の活動の結果と考察

子どもたちがより主体的に朝の登園のための準備物を自主的に活動する意識を持ってもらうためにどのようにしたら良いか考え、次のような活動を子どもたちに提起するようにした。

<取り組み-1>自分で身支度をするという「宿題」に取り組む

子どもたちに、自分たちで身支度を整えてくるように課題を伝えた。その際に「宿題」という言葉を用いた。その意図は、小学校で出される自宅での活動を連想させるものだからである。きょうだいも小学校に通っている子どもも多く、自分たちも幼稚園から「宿題」が出されたということが、少し背伸びしている感覚になるのではないかと考えたからだ。もちろん、将来の小学校進学への見通しを持ってほしいという願いも込めての言葉である。また、この「宿題」は毎朝チェックすることにした。

<取り組み-2>「宿題」の見える化

今回の活動は習慣化を目指した連続的な取り組みが必要となる。そこで、「宿題」の成果が一目で分かるように、表を作成し、身支度ができた時には教師からシールをもらい貼っていくことにした。

それにより、自分がどのように「宿題」に取り組んでいるかが分かる＝見えるようになり、より取り組みへの意欲が持てるようにした。

また、クラス全員が「宿題」を完遂した日は、教師から「キラキラのご褒美シール」を通園バッグに貼るようにした。(図-1) これによって、園バスで通園している他のクラスの子も同士がクラスを超えて互いに意識しあい、「宿題」への意欲を持つことができるように配慮した。



図-1 キラキラのご褒美シールとバッグ

<取り組み-3>「宿題」のレベルアップ

「宿題」をクリアできるように従い、活動内容を増やしていく。これは、「宿題」ができるようになった子どもたちのモチベーションが下がらないように、より内容を増加させることで、挑戦する心を持ち続けてほしいという意図がある。

<取り組み-4>「宿題」は保護者に秘密にする

この「宿題」は保護者に秘密にすることにした。その理由としては、子どもが主体的に身支度に取り組むためである。保護者に「宿題」のことを伝えてしまうと、どうしても我が子に課せられた「宿題」を忘れないように先回りして準備してしまうことも考えられ、そうなると生活の主体者としての育ちから離れたものになってしまうからである。

子どもたちにとって「宿題」が「秘密」であるということも、興味が湧くものである。幼児期後半は、保護者に話すことができない事柄を持つということ、だけどそれは自分一人だけではなくクラスの仲間と秘密を共有すること、それを守ることが大切であることなどが分かる年代でもあるからである。

これらの「宿題」の取り組みを導入した時のクラスの様子は以下の通りである。

A. 「宿題」を導入した年長児クラスでの様子

教師:「ねえ、みんな。月曜日に清潔検査をしているけど、どうしても忘れてしまうお友達がいるよね。どうしたら忘れないでみんなが持ってこれるようになるかな？」

R:「だって、ママが準備せんもん！！」(R児はいつも忘れがちの子である)

Y:「爪は言っても切ってくれなかった」

教師:「そっか……。 (やはり保護者のせいになっているなあ。ここで「宿題」を提起しよう) じゃあ、「宿題」をするのはどうかな？」

A:「しゅくだいって、なんなん？」

教師:「宿題」って、先生とみんなのお約束ごとだよ。1年生になったら「宿題」があるんだよ。K組さんが「宿題」をクリアできたらピカピカの1年生になれると思うな。「宿題」やってみたい人」

子どもたち:「はいー！」(全員から手が上がる)

教師:「よし、じゃあ、最初の「宿題」を発表します。ハンカチ・ティッシュを持ってくる！です」

J:「えー、忘れてしまいそう」

教師:「そうだね。忘れちゃうお友達もいるかもしれないね。でも大丈夫。みんながお家に帰っても「宿題」を思い出せるようにメダルを準備しました。(メダルを提示)これをリュックにつけておいたら、あ！ハンカチ持って行かなくっちゃ”って思い出せるでしょ？そして持ってきたらみんなの名前が書いているこのチェック表にシールを貼るよ。ご褒美シールはキラキラだよ！」

子どもたち:「やったー！明日から絶対持ってくる！」

教師:「クラスのみんなでがんばろうね。あと、これは先生とみんなの秘密の「宿題」だからおうちの人には秘密だよ！わかったかな？」

子どもたち:「はいー！」

このように子どもたちには「宿題」が受け入れられ、翌日から活動が開始されるようになった。

毎朝の「宿題」の確認手順としては、以下の通りである。

- ①朝のお集まりの時、自分で準備して持ってきたか確認をする。

- ②持ってきていたら、チェック表に自分でシールを貼る。
- ③どのように取り組んだのかを、全体の中で発表し合う。
- ④クラス全員が揃ったら、ご褒美シールを貼る。

この一連の手順の中で重要なのは、③である。これを行うことで、以下のような教育的効果があると考えられる。

「宿題」を忘れたことで、その忘れた個人がクラスの仲間から責められる場合も考えられる。そうなってしまうと「忘れたか、忘れなかったか」という結果ばかりに着目することになってしまい、忘れた子を責めるといった行動が表出し、「忘れた子＝悪い子」という評価になってしまう危険性がある。そうすると、逆にクラスの間関係の悪化を招く恐れがある。



図-2 シールはりを行う子どもたち

そこで、忘れた個人を責めるのではなく「なぜ忘れてしまったのか」という理由を話したり、また「どうしたら忘れないように取り組み続けることができるのか」というアイデアをクラス全体の中で出しあうということが大切である。それにより、対話を中心とした考えを出しあい、原因を追求するだけでなく共同的な問題解決型思考の基礎を育てる重要な機会となる。これは、幼稚園教育要領でも求められている「主体的・対話的で深い学び」につながる活動であるといえるのではないだろうか。

このように仲間と協力し合うことで、乗り越えることができる経験をすることは、子どもたちにとって協同性の育ちを目指すこともできると考えられる。つまり個人的な課題を協同的な活動で乗り越えることができることにつながる姿勢を育てる取り組みであるといえる。

では、具体的にどのように「宿題」活動に取り組む中で子どもたちが対話しつつクラス内での課題に取り組んで行ったのか、事例を通して検討していきたい。

取り組み事例①

よく「宿題」を忘れてしまう A 児。そのためクラスで揃う日が来ないためキラキラシールがもらえない状況が続いている

- 教師:「じゃあさ、「宿題」を忘れないために、どうしたらいいかな？」
 S:「帰ってすぐ準備する!」
 K:「玄関に置いとく!」
 H:「靴に入れておく」
 A:「じゃあ、僕、今日帰ってすぐにハンカチの準備しよう!」

【クラス担任の気付き・感想】

クラスで意見交換をした中で、自分の意見を押し通すだけでなく、友達意見を参考にし、実施してみようと気合を入れる子どもたちの姿に、成長を感じました。

【事例の考察】

「宿題」を忘れてがちな A 児も友達の取り組みの具体的な様子を聞くことで、自分なりの取り組みの具体的なイメージが湧いていたのだろうか、早速、どのように行動をするのか目標を立てていた。いくつか案が出されているが、自分が最も取り組みやすいと思った方法を自分なりに取捨選択している様子が伺える。

一方で、「宿題」を忘れずに準備してくる子どもたちは自分なりの方法を考えており、子どもたち自身で試行錯誤を重ねながらも忘れずに実行する方法を獲得していることも伺うことができる。

取り組み事例②

「宿題」を忘れてしまった M 児に、つい冷たい態度をとってしまう子どもたち

K:「M ちゃんがリボン忘れたけん今日もキラキラシールもらえんやん」

子ども:「あーあー。またもらえん」

M:「・・・(ちょっと黙って)ごめんね」

教師:「誰が忘れてしまうか分からないよ。もし、自分が忘れてしまった時に言われたらどうかな。今度、誰かが「宿題」を忘れたらどうする？」

T:「どうやったら忘れないか教えてあげる！」

教師:「お！それいいね！忘れた子にも優しく教えてあげられるといいね」

【クラス担任の気付き・感想】

自分の素直な気持ちを友達にぶつけてしまっていた子どもたち。この取り組みを通して友達と一緒に目標に向かい、友達を励ましたり、優しい言葉をかけたりと、相手を思いやる気持ちが芽生えました。

【場面の考察】

誰かが忘れてしまうと、ついついその子をせめてしまうことも起こりがちである。そうすると「誰が悪いのか」と個人を責めてしまう言動も見られがちだ。もちろん、その子のせいではあるが、しかしながらそれを追求してしまうと、個人批判・人格批判にもなりかねない。こういう時こそ、課題を持った子を追求するのではなく、なぜ忘れたのか(できなかった理由の振り返り)や、次にはどういう行動をすることができるのかという、問題解決的な思考にどう転換することができるかが、教師の役割でもあると考えられる。この場面では、なぜ忘れたのかということについては、確認することができてはいないが、今後、どのように対応すれば良いのかをクラスの仲間と知恵を出しあいながら考える意識が子どもたちの中に芽生えることができたと思う。

取り組み事例③

たった一人だけ課題をクリアした Y 君

教師:「今から「宿題」チェックしていくよ」

G:「ハンカチ、ティッシュ持ってきたよ！」

Y:「違う！今日からリボンもだよ！」

教師:「よく覚えていたね！今日からハンカチ、ティッシュ、リボンだったね」

子どもたち:「リボン忘れた」「持ってきていない」「お母さんがいらんて言ってた」など口々にいう。

教師:「今日の「宿題」できたの、Y 君だけ？」

Y 君:「僕だけやん！」

教師:「すごいね！3 つになったのに覚えていたんだね！Y 君だけ「表」にシール貼れるね！」

子どもたち:「Y 君すごい！」「さすがやん！」「明日は持ってこよう」

その日、Y 君はクラスのヒーロー的存在になりました。

【クラス担任の気付き・感想】

2 つ目の「宿題」をクリアする前にも波がありました。2 つ目の「宿題」をクリアしクラス中で大喜びをしたのもあり「宿題」に対しての意欲も変わったと思っていました。その次の日まさかのクラスで 1 人だけとは思っておらず、驚きました。

普段の Y 君はやんちゃ坊主の男の子。その日だけはクラス中の子ども達が Y 君を尊敬の眼差しで見えており何をするにも真似っこする子どもたち。ヒーローのような Y 君でした。

【場面の考察】

課題が増えると忘れる子どもも多く見られる。今回の「宿題」となった「リボン」とは、登園時に制服の襟に付けるものであり、普段の着用義務はないものである。よってリボンをつけずに登園することが慣例的に行われており、何か行事があるときに着用することが多い。またこの「宿題」活動は保護者にヒミツで行われているので、「宿題」として準備してくる難しさがある活動であると言える。そこで、一人だけ Y が忘れずにやってきたということだ。たった一人だけが達成すると、子どもたちから羨望の眼差しで見られる姿は幼児期後半らしさであると言える。Y 君にとっては、いつもとは違う周囲から一目置かれる反応があったことで、認められる嬉しさを感じることができたのではないだろうか。

B. 「宿題」活動に取り組んでの担任教諭の感想

年度当初、子どもたちに身の回りの準備を意識しえて欲しいと考え、毎日のように「忘れ物をしないように」と言葉かけを行っていたり、または視覚的にわかりやすく注意喚起を促すために黒板に忘れていた子の名前を書いていたが、それでも忘れ物は全く減らない状況だった。それが、この「宿題」の活動を始めてからは、なぜか子どもたちの忘れ物がどんどん少なくなっていくことに驚いた。あんなに何度も注意を促しても変わらなかったこともたちがどうしてこんなに変化をしたのか、不思議でたまらないということだ。

とにかく、担任教師自身、子どもたちの変化を呼び起こした今回の活動に驚いている様子が伺えた。

C. 「宿題」活動による子どもたちの変化を呼び起こした要因についての考察

その理由は以下のようなものがあると考えられる。

1. シールを貼る楽しさ 活動の成果の見える化

忘れないように自分なりに取り組んだ成果が、シール表に形となって現れることで、子どもたちにとっての達成感や今後も継続して取り組もうとする活動要求を育てていると考えることができる。

2. 友達の考えを聞く場がある 相互に学びあい育ち合う関係

今回の活動は自分ができるかできないか、という個人的な結果を追い求めるのではなく、互いに取り組みを伝え合うという場面を取り入れることを大切にしてきた。それにより、子どもたち同士で意見を交わすことを通して、他者の話を聞こうという姿勢が身につくと同時に、他者理解にも大きく寄与できていると考えられる。

同時に、友達の具体的な取り組みの方法やアイデアを聞くことで、自分の取り組みの方法を振り返り、より良い方法などを考えることができる。また、毎日確認することなので、日々、いろんな方法を試すことができるなど、試行錯誤の機会を多く持つことができる。

3. みんなでできたら嬉しい 活動の目標の共有化と協同性の育ち

クラス全員で忘れ物がない日はキラキラシールがもらえるという、個人的な報酬だけに喜んでいるだけでなく、みんなで揃った嬉しさを子どもたちが感じている様子が伺えたということだ。クラスの仲間と考えを出しあいながら、どのようにしたら全員で揃うことができるのかという共通の課題に取り組むからこそ協同性が育つのであり、共通の目標を達成できた喜びなのではないだろうか。だからこそ、自分たちのクラスでの取り組みが誇らしく思えてくるのであ

う。

園バスに乗っている際に、違うクラスの子どもたち同士が「オレ、もうキラキラ4個」「いいな一、僕たちのクラスだってもうすぐ追いつくよ」など、クラス間で成果を話し合っている姿が見られたということだ。クラス間競争としての意識かとも思われるが、子どもたち一人ひとりがクラスの一員としての所属意識を持っており、また自分たちが「宿題」活動の目標に向かって努力した成果が誇らしく感じている姿であるともいえる。このように、一見個別的な活動と思われるものであっても仲間と共に取り組むことで、協同性の育ちに取り組むことができることを示している。

3. 身辺自立の活動の取り組みについての保護者アンケート内容と考察

前述の通り、この「宿題」活動は、保護者に秘密にして行ってきた。活動開始から1ヶ月後に今回の取り組みの意図と経緯を保護者に説明するとともに、「宿題」活動期間中の子どもの様子や保護者の気づき等について自由記述アンケートをお願いした。ここでは特徴的なアンケートの記述内容を示しながら、保護者の意識の変化等について検討を加える。

A. 保護者のアンケートの記述内容

- 「宿題」という響きに憧れてか「今日の「宿題」は・・・」と意欲的に取り組んでいました。また自分の持ち物を毎朝しっかり確認することができるようになってきました。小学校に上がる前に、このことが少しでも身につけてくれたら、自分のことは自分です、忘れ物をしないことを自覚し、自分なりに考えて行動してくれるようになりそうですね。
- 「宿題」が出て数日は忘れなかったようですが、一度忘れた際に、本人がショックだったようで、黙って様子を見ていたら、メモ紙に「宿題」を書き忘れないよう通園バッグの横にいつも置いていました。それからは忘れていないようです。朝の支度の際、毎回その紙を読んでいる姿がとても微笑ましかったです。
- 初めはカバンに何かをつけて帰ってきたので、「何？」と聞くと子どもから教えてくれました。星シールが増えるたびに「今日はリボンを持っていく」「エリを正す」と子どもから教えてもらい、いく前に必ず自分で確認していました。私が言うのではなく、自分から先生の言われたことを理解し取り組んでいたのもとても楽しかったです。ぜひ続けてもらいたいです。
- 朝の準備をしっかりとできるようになりました。伝達もちゃんとできるようになったので、やって良かったと思います。意欲、自立、しっかり取り組むことで、1月末からたくさん成長しました。○
○ちゃんが忘れてたから・・・○○が忘れとった・・・と家に帰って話をしてくれます。そのことによって園でイヤな思いをする子どもたちも出てくるんじゃないかちょっと心配です。

など、意欲的に取り組む姿や忘れた時の悔しさ、達成できることの嬉しさ、活動の経緯を報告する姿なども保護者のアンケートから窺い知ることができた。

それ以外の保護者の代表的な記述内容をまとめると、以下のようなものであった。

- 卒園時期の直前から活動を導入したということで「入学前にとても良い取り組み」との意見がほとんどだった。
- 入学が不安だったが、子どもの様子を見て少し安心できた。

- 園からの便りで知らされていなかったが、子どもが自分で理解し親にわかるように説明してくれ成長を感じた
- 続けて欲しい取り組みであるという声が多い。
- 子どもの言葉を信じて、「宿題」に取り組ませる保護者が多かった。
- 親が自分で支度・片付け等行ったほうが早いので、つい、子どもにさせる前に親がしてしまっていた。「宿題」の取り組みが始まってから親も子ども自身にさせなければならないと意識するようになった。
- 「宿題」を忘れると「自分のせいで・・・」と落ち込む姿があったが、次の日からは忘れないように子ども自身で確認するようになった。
- 先生と約束した初日から、帰ってすぐ支度をし、嬉しそうにしていた。
- 「宿題」が始まってから、園の支度、片付けを自分でできるようになり、良い習慣が身についた。
- 子どもが言っていることと園からのお便りが違っているので初めは信用していなかったが涙ながらに言うので、本当かもしれないと思った。もっと子どもが言うことをきちんと聞いて信じてあげるようにしたい。
- 家でも手伝いを進んでするようになった。
- 忘れ物をした日はあえて届けず、忘れた人の気持ちを感じられるようにした。

B. 保護者アンケートからの考察

これらの保護者からの記述をまとめると、いくつかにまとめることができる。

まずは、「宿題」活動の実施に対する積極的・肯定的な評価である。その背景には、今回の活動が我が子の成長や変化に結びついたという実感が保護者にあるからであろう。自由記述の中にも「自分で身支度をするようになった」と自立する姿を認めるものや、または「家のしごとをするようになった」など、「宿題」活動を契機に子どもの家庭内での生活における具体的な行動の変化を認める記述もある。単に「宿題」を実行するだけでなく、家庭の中の身の回りの整理なども行うようになるなど、「宿題」活動が他の活動へと影響を及ぼしている様子があり、またそれらが習慣化しつつあることなどの主体的な行動を促すきっかけとなったこと、また、「宿題」を忘れて落ち込んでいても、次は忘れないようしようとする試行錯誤しながら前向きに取り組む意識、そして自分のやるべきことを親に説明できるなどの変化が見受けられたということからも、子どもの内面的な変化も捉えつつ、今回の活動の成果を感じていることが窺える。保護者にとって、小学校に進学することは大きな期待もあるが、不安もある。園生活とは違って小学校になるとより自立した生活が求められ、また学校からの様々な課題を理解しそれを実施する力が我が子が持っているかどうか分からないからである。そういう心配がある中、今回の「宿題」活動を通して、我が子も「ちゃんとできる」ことを認識できる大きなきっかけとなったのではないだろうか。

次には、子どもの変化のみならず、保護者自身も子どもへの認識や意識が変わってきている様子が伺える。例えば、子どもの身支度についても、時間的な効率を考えると保護者が行った方が早く間違えない。しかし、様々なことに手を出していくことよりも、子どもの成長を期待しつつ「待つ」や「見守る」ことが大切であり、またそれが子どもの成長につながるということを感じている様子が伺える。このような意識を持つことで、保護者もより子どもの内面で育ちつつあるものを理解しようという意識に変化することが期待される。また、子どもからの要求(リボンが必要など)についても、園からの連絡と齟齬がある状況で「どちらを信じるのか」という事態が発生している。当初は子どもの言葉を信じていない様子がうかがえたが、次第に「我が子の言葉を信じる」ことへとシフトしているようであった。これは子どもにとって大きな影響があると考えられる。自分の言っていることを保護者が信じてくれるかそうでないかは、子どもが信じられる存在と見られているかどうかという自己評価にも

大きく影響があるからである。また、我が子の言葉を信じ、信頼できる存在として認識できることは、親子にとっても今後の良い関係を構築できるきっかけになるのではないだろうか。

保護者の意見には、今回の「宿題」活動について危惧しているものもあった。それは「忘れた子への対応」についてだ。「忘れた子がかわいそう」や「責められるのではないか」という記述に現れている。活動の詳細な経緯を知らない保護者にとっては当然の内容だと考えられる。しかし、今回の活動では、忘れてしまった個人を責めるのではなく、「なぜ忘れたのだろう」という「原因」を探り、また「次(明日)はどうしたらいい?」という「活動の方向性」を明らかにすること、そしてそれをクラスのみんなとの話しあい(対話)を通して考えていくことを重視して行ってきた。個人の課題を責めるのではなく、それらをクラス全体で考えていく中にこそ子どもたちも「できるようになりたい」という発達要求を自ら育てていく大きな契機となるようにしているということ、保護者に伝える必要があると考える。そういう保育を行っていることを説明することを通して、子どもたち同士が互いに学び合っている様子を保護者にも理解してもらえし、同時に園の取り組みの理解にもつながるのではないだろうか。

IV. おわりに

今回の実践例は、決して小学校のように「宿題」を子どもたちに課すことを肯定・推奨しているわけではなく、大切なことは、子どもたちが「主体性」を持って、「自らの生活をつくる存在」であることを自覚できることである。また、それをいわゆる 10 の姿の「自立心」や「道徳性・規範意識の芽生え」に記載されている「しなければならないこと」としては、それを協同的な活動に転化しつつ、「しなければならないこと」から「やってみよう」「やりたい」という子どもの「主体的要求の育ち」として捉えることが大切ではないだろうか。今回の登園の準備も、これらを個別の能力として、または個人的な活動として「しなければならないこと」と苦役的に行うものではなく、他者と意見を交わしあい考えあうこと、つまり「対話」を重ねながら取り組むことで、時には批判的にもなるが、それを乗り越えてお互いに教えあい学びあえる存在であることが子どもたちの意識として育ったと考えられる。もちろんそれは将来のアクティブラーニングにもつながることでもあるが、学校生活以上に、一人の人間として今後の様々な課題に出会った際に、自分一人で考えるのではなく他者と共により良い方向性を考えていく素地を育てていくことであり、それが将来的には民主的な人格の育成にもつながる基礎であると考えられる。

また、それには保護者との連携や接続が大切である。児童福祉法には保護者に指導することが保育者の役割として明記されている。しかし、それは直接的に保護者と関わるという方法もあるが、今回のように、子どもの変化を促す活動の姿を保護者と確認しつつ、保護者の意識・認識の変化を促すという方法もあるということを示しているのではないだろうか。

今回の実践の課題としては、取り組む期間が短かったため、本当に子どもに身の準備の意識が習慣化されているのか確認できなかったということだ。より長期的に取り組むことが今後求められる。またそれは保護者との密接な連携も必要になってくると考えられる。それらを踏まえ、今後の実践を組織していきたいと考える。

最後に、今回の実践報告のために一緒に取り組んでいただいた A 幼稚園のご協力・ご承諾のもと、本活動をまとめることができた。園長先生以下職員の先生方および保護者の皆様には深く感謝を述べたい。